



## Profile

生物資源学研究科

教授 成岡 市

### Q 三重大学のおしゃれについて

**A** 「歴史」と「伝統」は、古いこと（もの）を懐かしむものではなく、常に新しさを求め、改善を続け、創立当初よりはるかにできあがっている現在があるのですね。歴史と伝統を重ねた三重大学（卒業生）が社会で高く評価されている秘訣がここにあります。受験業界の偏差値に迷わされない「本当」があることに目を向けましょう。

### Q 自身のおしゃれなライフスタイルとしてのこだわり

**A** 測量などのフィールドワークで使う「野帳」を旅行記録簿として使っています。口紅サイズの糊を持っていると、ページの各所に思い出のチケットや伝票などを備忘録として貼り付けることができ、併せて自由な書き込みもできます。海外出張などでは帰国するとほとんど一冊がゴワゴワ状態に膨らんでいますが、あとで報告書をつくるのに役立ちます。「スケッチブック」式は、青色の3mm方眼野が入っていてとても便利です。長旅でページが不足したら、何枚かの紙を野帳サイズに切って針と糸で野帳の末尾に増刷分として縫い付けています。



## Q キャンパスのおすすめ箇所

### A 『不渴の井戸』

平成28年11月18日、  
土木学会選奨土木遺産「三重高等農林学校  
農場の給水井戸」が認定されました。  
大正11(1922)年4月、第一期入学生を迎えた  
三重高等農林学校は、海岸近く低湿地が広がる  
実験農場に、豊富な灌漑水を確保して適切な  
土地改良を行うという緊急かつ最大の解決課題  
を抱えていました。このとき、教官と学生が

一丸となって井戸の掘削を行っています。完成した井戸は、地下70mの深さに達し、  
毎時72トンの湧水を農場に供給し、時代の超先進的な教育・研究の要とすることが  
できました。

初代の上原種美校長は、「農場の土地改良が成功したのは、最悪の条件下で最善を期  
するため、教官、学生が一致協力して最大の努力をした結果である」として、威信を  
かけたこの事業は校史に残る無形の精神的成果であったと評価しています。

現在でもこの給水井戸は使われていて、いつしか「不渴の井戸」と呼ばれるようにな  
りました。その時から現在まで延々と継承されてきた実践教育と実学、そして卒業生  
の系譜は、この井戸に象徴されているようです。

木々に囲まれた井戸周辺には遊歩道が整備され、ここを訪れる人々に歴史の意義を静  
かに伝えています。



### 「歴史を紡ぐ」

1922（大正11）年4月、三重高等農林学校は第1回の入学生を迎えるのであるが、そ  
の時点で実験農場の整備は未だ完成していなかった。

志登茂川左岸のこの地帯は、低湿地で排水の設備も全くなく、加えて塩害が甚しくて、  
実験実習農場としての実質も形態も全然備えていなかった。このような現状を見兼ね  
て一部には、この際むしろ他の適地を探して移転した方が良いとの声も出たが、上原  
校長は断乎反対して、如何に土地が劣悪であろうとも、農業工学の全能を傾けてこれ  
を改良すべきであるとして、移転論を一蹴し、敢然これが改良の方策を講ずることを  
決意表明された。同年5月に行われた初耕式に於いて、校長は「農場の土地改良は本  
校にとって緊急の最大重要事項である。教官、学生相互に協力して、この難事業を成  
し遂げるべきである」と訓辞を述べられている。

名誉教授 山家光治

三重大学50年史「ニュースレター」No. 8 (1997) 一部抜粋

<http://www.bio.mie-u.ac.jp/kankyo/chiiki/noudo/history2.html>